

いつでも、どこでも、だれでもアクセス

札幌で「ユビキタス実証実験in赤レンガ」開催される

2005年1月25日(火)から3月25日(金)、北海道庁赤レンガ庁舎にてユビキタス実証実験が行われました。この実験は、北海道、札幌市、国土交通省北海道開発局、独立行政法人北海道開発土木研究所が共同で行い、積雪寒冷地におけるハード面の耐候性調査や赤レンガ庁舎内にて、旅行者や市民を対象にユビキタス・コミュニケーターを貸し出し、ユビキタス空間の体験やアンケートなどを実施。期間中、約1900名の方が実験に参加しました。



ユビキタス・コミュニケーターの画面。実験中は多言語（日本語、英語、韓国語、中国語）に対応した画像と音声の情報を提供



ユビキタス・コミュニケーターをICタグに当てることで、「動画・音声・文字」にて赤レンガ庁舎内の観光、歴史など様々な展示物の情報を入手

互いに支えあうユビキタス情報社会とは？

「ユビキタス実証実験in赤レンガ」の目的は、観光スポットとして知られる北海道庁赤レンガ庁舎内で、道内を旅行されている方や道民の方々にユビキタス・コミュニケーターを利用してもらい、ユビキタス社会の体験を通して感じていただいた、今後の活用についてのニーズやアイデアなどの意見を集めること。同時に今後、道内での「自律移動支援プロジェクト」展開の検討に向けて、ICタグの積雪寒冷地における耐候性能（機器等の安定性・動作確認）を調査するため、実際に屋外に設置した環境において冬期間の基礎データを収集すること。また、国や北海道、市町村が、来るべきユビキタス社会について理解を深めることを目的に行われました。

ユビキタスとは、「どこにでも存在する」という意味を持つ英語のユビキタス (ubiquitous) からきています。あらゆるモノに、マイクロチップを入れ、その場所が持っている情報をネットワークで繋いで人々の安全・安心な生活をサポートするのが、ユビキタス情報社会の目指すところ です。

国土交通省では、ユビキタス情報社会の実現を目指して、「自律移動支援プロジェクト」を推進しています。これは、ITを活用して、移動手段・交通手段・目的地などの各種情報を「いつでも、どこでも、だれでも」アクセスできるようなシステムの構築です。とくに高齢者、障がい者等の社会参画や、観光振興への環境整備、緊急時などにも役立えます。実現に向けては、関係省庁と連携しながら、民間活力や住民の参画を結集して進めることが求められています。



ICタグを付けた展示パネルにユビキタス・コミュニケーターを当てて北海道の観光情報を入手

北海道 建設部 企画調整課
建設政策グループ 主査

古屋 剛さんに
聞きました



北海道仕様のユニバーサルな社会を

国土交通省の「自律移動支援プロジェクト」という流れの中で、道内では関係機関が参加して「公共空間における情報に関する研究会」を設置し、昨年度実験を実施しました。

ユビキタスコミュニケーターのさまざまな使い方が考えられる中で、赤レンガ庁舎には北海道を紹介する展示物が数多くあり、観光客も多く訪れることから観光に重きをおいた実験を行いました。なかでもここは外国人観光客が多く訪れる場所なので、多言語対応のシステムを意識しました。16年度の神戸でのプレ実験をスタートに、17年度は浅草や青森でも行われるようですが、一般の方に携帯端末（ユビキタス・コミュニケーター）を使っていたのは全国的にも札幌が初めてで、期間中、1900名近い方が利用され好評でした。そのうち、70名弱の外国人を含む約900名の方にアンケートの協力をいただき、「障がい者でも使えるものを」「携帯電話と一緒になら便利」「道案内できる機能があれば」など、貴重な意見をいただきました。外国の方は、「自分の解る言葉で、音声で案内情報を聞いたのが良かった」という声が一番でした。

今回の取り組みに、障がい者の方からの熱心な問い合わせ、また貴重な御意見もいただきました。行政側もまだ手探りの段階ですが、互いに支えあう地域社会にしていくことは、住民共通の課題です。ユニバーサルな社会の実現に向け、さまざまな分野の人々が参加、協力して、街の中でこのようなシステムが誰でも使えるようになっていけばいいですね。